

ぐだおが女性サーヴァ
ントに耳かき奉仕して
もらう話。

多奈川

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類最後のマスター、藤丸立花（通称ぐだお）がカルデア内の女性サーヴァントに耳かき奉仕してもらおうお話です。

メインで登場するサーヴァントは、筆者がFGOで所持しており育てていて、なんとなく勝手が分かっているキャラになります。（レベルマ、絆5以上くらい？）

なので不定期更新気味かも。

場合によってはR15くらいの要素はあるかもです。

現在登場キャラ

・沖田さん

・マシユ

・ニトクリス

・沖田オルタちゃん

目次

沖田さんに膝枕で耳かきされる話。

1

マシユに綿棒で優しく耳かきマツサージ
してもらう話。 ————— 10

ニトクリスに耳の外側をふきふきしても
らう話。 ————— 18

沖田オルタちゃんにも膝枕で耳かきされ
る話。 ————— 25

沖田さんに膝枕で耳かきされる話。

「あれ、ダヴィンチちゃん。これって……」

人類最後のマスター、僕こと藤丸立花は、夕食後に暇つぶしがてらダヴィンチちゃんの工房へ顔を出していた。

「おや、見つけてしまったかい。ダヴィンチちゃんの素敵なショップの新商品を……」
「いや、見つけたというか、すごい目につくところに置いてあるからさ。しかもご丁寧に手書きPOPまでつけて」

それは、先端がへら状になった細長い棒状の道具。江戸時代、享保年間に日本で開発された、耳の穴の中を掃除するためのもの。そう、耳かきだ。

「でも、何で耳かきなんて急に置くようになったの？」

「それはだね、最近、日本出身のサーヴァントがカルデアに増えているだろう？ 今回、耳かき棒をショップに置くようになったんは彼らのリクエストによるところが大きいいね」

「ん？ 日本出身のサーヴァントと耳かきにどういう関係が？」

「そもそも耳かきというのはだね、東アジアの人に多い乾いた耳垢の除去には向いてい

るが、欧米人の粘性の多い湿った耳垢の除去には不向きなのさ。というか、欧米では耳かきという道具そのものがないんだよね」

「へえー、初めて知ったよ。日本では当たり前前にあるものだからさ」

そう言い、おもむろに耳かき棒を手に取る。

そういえばカルデアに来てからというもの、耳かきをした覚えがない。今まで気にならなかったが、急に耳の奥がむずむずとこそばゆくなってくる。

「お、やはり君も興味あるかい？　今回は初回特別サービスで10万QPと、大変お得になっっているよ？」

うーん、この商売上手。というか、10万QPって安いな。クエスト一周すればすぐ手に入るし。え、感覚が麻痺している？　ははは、まさかまさか。

「うん、買うよ。これください」

「はい、お買い上げどうもありがとうございます。これからは是非鼻屑にしてくれたまえ」

☆☆☆☆☆☆☆☆

「さて、では早速……」

マイルームに戻り、先ほど購入した耳かき棒を取り出す。竹製の片方がへら状に、反

対側には梵天（ふわふわとした白い羽毛）がついたオーソドックスなタイプの耳かきだ。そろりと、耳かき棒を耳穴へやる。しよりしよりと、細かい耳垢が耳かき棒に当たる音が心地よい。

耳の内側に傷をつけないよう、優しく撫でるように動かしてやる。気持ちよい感触だ。

その調子で耳かきを続け、少し奥に耳かき棒をやると、コツンと先端に何かがつつかる。……遂に來たか、ボス級（の耳垢）が。

これまでは怪我を恐れて最小限の力で進めていたが、ここからはそうもいかないだろう。ぐつと指先に力を込める。……むっ、硬い。ぱきつと僅かに耳垢が浮く感触はあるが、それ以上動く気配がない。むむむ、どうしたものか。

大きな耳垢に苦戦していると、コンコンと誰かがマイルームの戸を叩いた。

「マスター、いますかー？ 沖田さんです。今度の編成のことで少し相談したいことがあるんですけれど」

「お、沖田さん？ うん、大丈夫だよ。入って」

そう促すと、いつもの新撰組の羽織を脱ぎ、ノースリーブの着物を着た沖田総司が元氣よく部屋へ入ってくる。

「お邪魔しますね。おや、何か用事の最中でしたか？」

「ああ、いや、少し耳かきをしていただけで、中々うまくいかなくて……」
「え、っ!? 耳かき、ですかッ!!」

うわずつた声を上げ、ぐわつと沖田さんが顔を寄せてくる。白く透き通った肌、済んだ瞳。……可愛い、好きだ。結婚したい。

「お、沖田さんも、耳かきに興味あるの?」

「興味があるか、ですって? そんなのあるに決まってるじゃないですか!! 耳かきといえは沖田総司、沖田総司といえは耳かき! 歴史の教科書にも書いてある常識ですよ!!」

それでいいのか新撰組一番隊長……。というか、それが本当だとしても教科書にはそんなこと書いてないよ。

「さあ、沖田さんの前で耳かきと口にしたからにはもう逃げられませんよ! マスターの耳の掃除、この沖田総司にお任せください!!」

☆☆☆☆☆☆☆☆

「さあ、こちらへどうぞ。マスター」

ベッドの上で正座した沖田さんが、自身の膝をぼんつと軽く叩く。

「え、膝枕！ いいの!？」

思わず心の声に正直になっていた。だって沖田さんのニーハイ(?) 生足膝枕だぜ? 「いいですとも! さきつ、早く沖田さんにマスターのお耳掃除をさせてください」

「で、では、失礼して……」

自身の頭を、柔らかく、そして、やや筋肉質な沖田さんの膝枕へと埋める。右耳を上にし、沖田さんへ背を向ける形になる。

「では、まずは耳の中を拝見しますね。……こ、これは! マスター!!」

「え、何……?」

「耳垢貯めすぎですよ! さては随分ほったらかしにしていましたね? これもう少いで耳穴埋まるくらいの大変な量ですよ」

「ひえっ、確かにカルデアに来てからは耳かきしてなかったけど、そんなに……?」

なんかもうすごい恥ずかしい気分だった。

「鼓膜の近くなにか山盛りですよ。……あ、興奮してきました」

今、何かとんでもない言葉が聞こえたような。

「それじゃ、耳かきしていきますよ。もし痛かったりしたら手をあげてくださいね」
まるで歯医者みたいだと思った。

沖田さんは、すつと慣れた手つきで耳かき棒を耳穴へと挿入する。

先ほどと動揺にしやりしやりと細か耳垢の粒が耳かき棒へと当たる。そして、沖田さんはそのまま奥へ耳かき棒を進入させていく。その道中で、軽くマツサージするように耳の内部の壁を擦るのがとても気持ちいい。

「ふふっ、気持ちいいですか、マスター？ 大物を退治しますので、姿勢はそのままお願いしますね」

自分が先ほど敗戦を喫した耳垢への攻撃を開始する。

こつこつこつと、まずは様子を見るように。そして、ぐーつと、耳垢ではなく、耳の壁をへらの裏側で押し当て始めた。それにより耳垢と壁の間にわずかに隙間ができる。沖田さんはそれを見逃さないようにへらを滑り込ませ、ぐぐつと、今度はテコの要領で一気に耳垢を浮き上がらせる――！

さくつ……。みしつ……。くつぐくつ……。ぐつぐうううつ……。ぼとつ。

「……ふう、まずは第一関門突破といったところですね。無明三段突き、炸裂です！」

一旦耳かき棒を抜き、取れた耳垢を脇に広げたティッシュの上でこんこんと落とす。「うわっ、でか！ こんなのが耳の中に?」

ティッシュの上には1センチ正方ほどの耳垢があった。

「中々の大物でしたね。2 wave目の単体エネミーくらいの強さでしたが、この沖田さんにかかればどうってことはありませんでしたね」

うーん、メタい。膝枕してるので彼女の表情を窺うことはできないが、おそらくドヤ顔しているのだろう。

「よーし、どんどんいきますよー!」

再び耳かき棒が耳内部へ挿入される。

すりっすりっ……ぞりぞり……。するっ……すうっ……。……とんとん。

溜まった耳垢が一つ一つ処理されていく。マイルーム内では耳かき音の他には、沖田さんの静かな息づかいが聞こえるのみだ。

他人に耳かきをしてもらうなんて小学校の頃に母親にやってもらったきりだったが、久しぶりにしてもらおうと自分でするよりも遙かに気持ちがいい。何だろう、自分でやるのと違って次はどこにくるか予想がつかないからだろうか。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「ふう、これで右耳は大体綺麗になりましたね。最後に梵天で細かい耳垢を取っていきますよ」

「は、は、は……」

くるくると回転しながら梵天を上下させていく。かりかりと残った細かい耳垢が羽

毛に絡まっていくのが音だけで分かる。へら部分と違う、梵天は耳穴全体をくすぐるよう移動する。そのため、気持ちよさが先ほどまでよりも高い。ん、ふう……と思わず声もれてしまう。

「くすつ。マスターは梵天がお気に入りに入りなんですネ。沖田さん、覚えましたよ。……こんなところでしょうか、梵天抜きますね」

名残惜しいが、しゅぽつと梵天で引き抜かれる。白い梵天に黄色い細かい耳垢がたくさん付着している。

「どうです、マスター？　これだけ耳垢を掻き出せば聞こえ方も変わってくるんじゃないですか？」

「……確かに、いつもと違ってなんだか新鮮な感じがする。沖田さん、ありがとう」

「いえいえ、いいんですよ！　それに、まだ半分つてところですしね。次は左耳いきますね。頭の向きを反対にさせてください、マスター」

そう言われ、体を沖田さんと向き合うように寝返りをうつ。

寝返りをうつと、そこは、黒色だった。

「——ッ!!」

「?　どうかしました、マスター?」

「う、ううん。何でもありません。本当何でもありません……!!」

いや、そりや少し考えれば分かったはずでしょ。だって沖田さんの丈の短い着物で膝枕とかされれば、そりやあそうなりますよ。……しかし、幸い沖田さんは耳かきに夢中で気づいていないようだし、この束の間のエデンを堪能させてもらおうとしよう。誰だつてそうする。人類最後のマスターだってそうする、間違いない。

「おや、左耳の汚れは右耳ほどではないですね。残念です……」

と、ややテンションを下げながらもさくさくつと耳垢を掃除していく沖田さん。正座を続けていることや耳かきに集中しているためか、うつすらと汗をかき、肌がやや湿り気帯びてきている。ほんのりと汗の香りが鼻に届く。ややツンとしたでももつと嗅いでいたいような、そんな独特な芳しさがある。

太ももでこれなら、もっと蒸れているであろうあの黒色はさぞ……。あつ、ダメだ。僕は腰を隠すように膝をくの字に曲げる。

「あれ、どこか痛かったですか？」

「いや、ううん、大丈夫。そのまま続けて……。もう少しゆっくりでもいいよ」

「？ 分かりました。ゆっくりお耳を綺麗にしていきますねっ」

しよりしより……。さくつ。ぐぐつ……。ぐつ。くくつ。すう……。

そうして、沖田さんとの耳かきの夜は更けていくのだった――。

マシユに綿棒で優しく耳かきマツサージしてもらおう話。

沖田さんの膝枕耳かきから三日後。

僕こと、藤丸立花はあてもなくふらふらとカルデア内を彷徨っていた。

あの出来事があつてからというもの、僕は耳かきの快感が忘れないでいた。だが、自分で耳かきしてもやはりどこか違う。誰かに自身の身を委ね、垢を丹念に掃除してもらおうという行為……。人に奉仕されるといふ喜びに僕は飢えていた。あと、若干匂いフエチになっていた。

「はあ……、とは言つたものの、人に耳かきを頼むとなると恥ずかしいんだよなあ……」
この前は沖田さんが耳かきをしてくれるというからそれに乗つかれる形でお願いできただけ、いい年して他人に耳かきしてもらうなんて何だか甘えているようで中々踏み出すことが出来ない。とはいつても、耳かきしてもらいたい欲は高まる一方。どうしたのか……。

「先輩、どうかしましたか？ 何だか浮かない様子ですが」

「あ、マシユ……」

たまたま出会つた後輩系美少女のマシユが心配そうに尋ねてくる。目隠れ女子つて

いいよね。

「最近はいけませんが、もしやどこか体調を崩されているとか……？
それはいいけません！ 私も付き添いますから早くメデイカルルームへ行きましょ
うっ!!」

「ちよ、マシユ？ あーっ！ 困りますっ！ マシユッ！ あーっ！」

有無を言わさぬマシユに、漫画ならドヒューンツツという擬音がつくであろう勢いで
メデイカルルームへ担ぎ込まれる僕であった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「すいませんでした！ 私が早とちりしたばかりに先輩にご迷惑をおかけしてしまいま
した……」

落ち着いたところで事情を説明すると、マシユは申し訳なさそうにしよんぼりとした
様子で謝ってきた。若干涙目になっている。……可愛い、好きだ。二人で幸せな家庭を
築きたい。

「ううん、僕のことを心配してくれたの行動だったんでしょ？ むしろ有り難いとい
うか、そこまで想ってもらえて先輩冥利につきるといふか……。ありがとうね、マシユ」

「せ、先輩……」

肌を紅潮させたマシユが僕を見つめてくる。なんだかいい雰囲気になっていないこれ？

メイドカルルームはスタッフ不在で、現在、僕とマシユの二人きりの状態だ。……うっ、そのことを意識すると急にドキドキしてきてしまった。

「せ、先輩！ あのですね！ わ、私……!!」

「ひゃっ、ひゃい！」

マシユの勢いに思わず素っ頓狂な声が出てしまった。

「よければ、私に、先輩のお耳のお掃除をさせてもらえないでしょうかっ!」

一瞬マジで告白されるかと思っただのは内緒だ。

「えっ、マシユが僕に耳かきを？」

「は、はい！ 頼れる後輩系サーヴァントナンバーワンを自負している、このマシユ・キリエライトが先輩のお耳を綺麗にするのは当然の責務かと！ この前読んだ書物にも、耳かきは親しい男女が必ず行う通過儀礼のようなものとありました！」

「うーん、その情報は正しいような正しくないような……。というより、そもそもマシユは耳かきの経験があるの？」

このカルデアに耳かきのための道具が販売されるようになったのはつい先日のこと

だ。カルデアで生まれ育ったマシユが耳かきの経験があるとは思えないが……。耳かきの経験がない人に自分の耳を託すのは例えマシユであつても少しこわい。

「いえ、知識はありますが、まだ実践経験はありません。正直なところ、今の私が耳かき棒を使つても、先輩を気持ちよくさせてあげるところか、怪我させてしまう可能性だつてあります……。なので、今回は耳かき初心者の中でも扱えるこの道具を使つてお掃除したいと思います！」

そう言うマシユは、メデイカルルーム内の棚に置かれていたプラスチック容器を手に取り、その中身を取り出す。

「そ、それは……」

それは、紙で出来た棒の先端に脱脂綿を蒔き付け丸めたもの。医療用品やメイク用品としても使われることがある道具だ。

「はい、綿棒です！」

☆☆☆☆☆☆☆☆

「では、先輩、私のお膝にごろんとしてくださいね」

メデイカルルームに設置されたベッドに腰掛けたマシユに促され、僕は彼女の膝枕へ

と頭を乗せた。彼女の履いているタイツのざらざらという感触が沖田さんのそれとは違い新鮮な感じがする。

「さて、お耳の中は……。さすが先輩、ほとんど汚れがありません。日頃からお耳の中も清潔にされているんですね！」

「そ、そうかな……」

ちなみに、さつき話した事情の中には沖田さんに耳かきしてもらったという話はぼかして伝えている。だって、二人きりのときに他の女性サーヴァントの話をするとマシユの目がこわいんだもん……。

「それじゃ、綿棒を外耳道に入れて細かい汚れを取っていきますね」

さりさり……と耳の産毛をかき分けて綿棒が耳の内部へ侵入してくる。耳かき棒とは違い、耳の壁を面で優しく刺激できるのは綿棒の特徴だ。入れるだけでも気持ちいい。

綿棒を上下に動かすとしやりしやりと、細かい耳垢の粒が綿棒の先端に絡み取られる音がする。

しゅりしゅり……。しゅくつ。そり……。すつ……。しよりしより……。

何度か綿棒を上下に往復させ、しゅくつと綿棒が一旦取り出される。一分にも満たない時間だったので、正直もつとして欲しい。

「はい、これで細かい汚れを取ることはできました。次に汚れていない方の先端で、お耳を優しくマッサージしていきますね」

僕の物足りなさを感じてか、マシユが綿棒でマッサージを開始してくれる。さすが頼れて気遣いのできる後輩系女子だ。

さりさり……。しゆくつ……。さわつ。しゆくつ……。すうつ……。

綿棒の腹で優しく何度も耳の壁をなぞってくれる。あー、気持ちいい。これ好きだ。

「次に綿棒を回転させて、全体をマッサージしていきますね」

綿棒を親指と人差し指でつまむように持ち替え、くりくりつと綿棒をゆつくり回転させる。耳の中全体を連続でなぞっていく刺激に思わず声が漏れてしまうほどだ。

くるつくくるつ……。さり……。くるつ……。しより……。しゆりしゆり……。

「くすつ、先輩可愛い……。このくるくる、気に入りましたか？ そろそろ、反対のお耳にいきましょう。気持ちよくてもあまり連続でやり過ぎると傷ができてしまうそうですから」

もつと続けて欲しかったがまだ反対側の耳が残っていると思い、素直に頭の向きを変えらる。

「では、汚れてしまった綿棒を取り替えて、と。まずはこちらもお掃除からいきますね」
さりさり……。と、先ほどと動揺に産毛をかき分け綿棒が入ってくる。

しゆり……。しやりしやり……。すう……。しやりしやり……。

やっていることは同じなのだが、右耳と左耳で感じ方が違うのか、気持ちよさも先ほどのものとはやや違うものになっている。

しやり……。しゆりしゆり……。しやりつ……。

掃除が終わると綿棒が一度抜かれ、マッサージのための耳かきが始まる。

さりさり……。しゆりつ。しゆつ……。さくつ……。しゆくつ……。すつ……。

「先輩の好きなくなるくる、いきますね」

「ん、あふう……」

ぞわわつと快感に全身が襲われ、声と共につま先がびくびくつと反応してしまう。

くるつ……。そわわつ……。しゆり……。くる……。くる……。しゆりり……。

数分ほどして耳のマッサージが終わり、綿棒が引き抜かれる。

「どうでしたか、先輩？ 私、ちゃんと先輩のことを気持ちよくできたでしょうか？」

「う、うん。すごい良かったよ。初めて耳かきしたとは思えないくらい上手だったよ」

素直にそう述べると、マシユはぱあつと表情を明るくした。彼女がもし犬ならしつぽをぶんぶん振り回しているのが見えるのだろう。

「あの、先輩。もしこれからお耳が痒くなったり、耳かきをして欲しくなったらすぐに私を呼んでくださいね？ 耳かきのできる後輩系サーヴァントのこのマシユ・キリエライ

トに、先輩のお耳の管理は任せてください！」

「う、うん。頼もしいよ。これからもよろしくね」

この後、マシユが独学でどんどん耳かきや耳マッサージの技術を身につけ、あまりの気持ちよさに僕がアヘアヘア言わされるのは、もう少し先の出来事だ――。

ニトクリスに耳の外側をふきふきしてもらおう話。

「はあ、エミヤの耳かき気持ち良すぎた」

ホクホクとした顔で食堂を後にする僕こと、藤丸立花。最近の趣味は耳かきをしてもらうこと。ついさっきも食堂にいたエミヤ（弓）に耳かきをしてもらったばかりだ。いい年になって耳かきをしてもらうなど……と少し小言も言われたが、きつちり最後まで綺麗にしてくれた。エミヤって下手な女性よりおかんみがすごい気がする。

「後は部屋に戻ってシャワって寝るかな。明日も素材集めの周回だし、はよ寝よつと」
軽い足取りでマイルームへと戻ると、扉の前に一人のサーヴァントが立っていた。

「あれ、どうしたの？ ニトクリス？」

大胆に晒された健康的な褐色の肌が溢れるほどに眩しい。

「やっと戻りましたか、我が同盟者。まったくファラオを待たせるとは不敬ですよつ」
「えっ、ごめん。でも、待ち合わせの約束とかしていなかったし……」

「ま、まあ、確かにそうですね。……コホン、とりあえず立ち話もなんですし、部屋に入れてもらっても？」

「あ、うん。今開けるね」

カードキーを使いマイルームの扉を解錠する。ニトクリスを中へ入るよう促すと、彼女はぼすんとベッドに腰をかけた。なんかもう若くて綺麗な女性がベッドに腰掛けるとそれだけでちよつと興奮してしまう。

「それで、貴方に話があつて待つていたわけですが——。何だか顔が赤くありませんか？」

「ええつ。ううん、さつき走つてきたせいかな。そのせいだな。あははは」

「そ、そうですね。トレーニングを怠らないとは良い心がけですね」

何だか良い方に解釈されてしまった。少しの申し訳なさを感じる。

「それで、僕に話つていふのは？」

「その、偶然にも、偶然にですよ？ 貴方が耳の掃除をされるのが好きだと聞きまして……。それでその、マスターである貴方が耳の詰まりから戦闘に支障を来してしまふのは私にとつても問題ですから？ このニトクリスが貴方の耳の汚れを取つてあげようかと思ひまして。ええ、良いのです。同盟者たる貴方だからこそ特別ですよ。頭を垂れ、喜びなさいっ！」

「え、ごめん。さつきエミヤに耳かきしてもらつたばかりだから……」

「ふふつ、しょうがないですね我が同盟者は。さあ、私の膝に頭を乗せ……。えつ、今何とっ？」

僕の返答が想定していたものと違ったのか、ニトクリスが固まってしまった。

「さつき、耳掃除してもらったばかりで、一日に何度も耳かきをすると耳を傷つけてしまうから、その、ごめん……」

なんでこうもタイムリングが悪いのか。気まず過ぎる。

「えっ、えっ、じゃあ、私はどうすれば？」

「それは、耳掃除はまた次回ということで今日はお帰りいただくしか……？」

ニトクリス顔真つ赤じゃん。ぶるぶる震えて泣きそうじゃん。……可愛いじゃん、好きだ。一緒に海辺で水をかけあつてイチヤイチヤしたい。

「えっとその、僕シャワつてくるからさ。ニトクリスも明日の周回メンバーだし早く寝た方がいいんじゃないかなって」

「……………。ま、待ちなさい！ この私の誘いを断るなんて不敬ですっ！ 不敬不敬っ!!」

子供みたいにだだをこね始めてしまった。どうしたものか。

「じゃ、じゃあ、この前もらったマツサージオイルがあるんだけど、僕がニトクリスにマツサージでもしてあげようか？ ……なんて」

「いえ、それは、何だか嫌な予感があるので遠慮しておきます」

これでもマツサージには自信があるのだが本人が嫌なら止めておこう。

そして、少しの間お互い口を開くことができずシーンと気まずい時間が流れる。眉間に皺を寄せて俯いていたニトクリスだが、何か思いついたのか顔を上げて僕にこう言った。

「その、先ほどは耳の内部を掃除されただけなのですね？」

「え、うん。耳掃除といったら耳の中の垢を取るんだから、そういうことになるけど」

そう返答すると、ニトクリスはしめたといい顔をする。

「そ、そうですか！ ふふふ、耳掃除というのを勘違いしているようですね、マスター。耳の内部に垢が溜まるのと同様に、耳の外にも汚れがつくのは当然のこと！ ましてや常に晒されている外側の方こそ汚れやすいといってもいいでしょう！ さあ、今一度私の膝枕に頭の乗せるのです！ さあ!!」

「ひえっ、は、はい……」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ふふっ、まるで赤子のようですね。可愛いですよ」

子供をあやすように頭を撫でられる。恥ずかしいが何だか気持ちよさもある。

というか、ニトクリスの生足膝枕ヤバイ。マジで。下の服装もほぼ下着みたいなもの

だし、雑念を捨てねば不敬を起こしてしまう。

「……思った通り、耳介や耳の裏側に汚れが溜まっていますね。特に裏側の汚れは臭いの元にもなるのですから、我が同盟者としてきちんと清潔を保ってくださいっ」

「そ、そうなんだ。ごめん」

いつもちゃんと洗っていたつもりなのだが十分ではなかったみたいだ。耳の裏の汚れなんて普通は目に見えないもんだし。

「それでは、耳のマツサージも兼ねて化粧水をコットンになじませて拭いていきますからね。じつとしてください？」

どこから取り出したのか化粧水のボトルと取り出し、コットンにぼとぼとつと液をなじませていく。

ぴたっ——つと、ひんやりとした触感が耳に当たり思わずビクリとする。

「もうっ、じつとしてくださいと言ったではありませんか」

「ご、ごめん。少しびっくりして……。もう大丈夫だから続けてもらってもいいかな？」
すつ……。しゅうう……。くくつ……。しゅつ……。しゅつ……。

耳介に押し当てたコットンを動かすとしゅうつと化粧水が耳に浸透する音だろうか。不意な音が聞こえる。まずは全体の表面を優しく撫でられ、同時に耳たぶを彼女の綺麗な指先で軽く摘まむようにマツサージされる。まるで赤子が母にされるように、僕は

ニトクリスに身を委ねる。

「ふふ、気持ちよさそうですね。次は耳の溝を一つ一つなぞって綺麗にしていけます」
ぐっ。ぎゅっ……ぎゅぎゅっ……。きゅうっ……。

先ほどより力を込め、コットンが丁寧に溝のなぞり上げていく。耳の外側が文字通り綺麗になっていくのを感じる。

耳の溝をすべて綺麗にし終わると、最後に耳の穴の入口へコットンを押し当てゆつくりと回転させていく。耳の穴が塞がれ、コットンを動かす音が内部でぞわわつと響いてゾクゾクする。

「はい、仕上げに耳の裏の汚れを拭き取りますよ」

ニトクリスは耳たぶを持って耳を内側に閉じ裏側を拭きやすいように露出させる。

くっ……ぐくっ……。と、コットンで二、三度擦りあげる。

「ほら、見てください。これだけの汚れが貴方の耳についていたのですよ?」

「ひえっ、真つ白だったコットンが薄く黄色に染まっちゃってる……」

「ふ、ふふふ。やはり私の考えていた通りですねっ。さあ、ごろんと頭の向きをかえませ
いっ」

ううつ、ニトクリスのむちしつとり太ももヤバイ。ここに住みたい……。頬を押し当てると吸い付いてくるようだ。

「こちらの耳も同じくらい汚れがついていますね。汚れたコットンも変えて、と」
ぽととと化粧水をこぼす音。これ好きだ。雨音とか水滴が落ちる音って何だか
ずつと聞いていたくなる。

「まずは表面をさつと拭きますね」

ひたつ……。すつ。しゅつ……。しゅつ……。しゅうう……。

表面を拭き終わると先ほどと同様の手順で溝をなぞり上げていく。

ぎゅつ……。きゅつ……。ぎゅう……。きゅきゅつ……。

途中、慣れない膝枕をしていたせいかわ、ニトクリスがかもぞもぞと足を動かし、びたつとくつつけられていた太ももをやや開脚させる。同時に彼女の内側に籠もっていた匂いが鼻腔を刺激した。

「？ 耳が赤いですよ、マスター？」

「ご、ごめ……。気持ち良くて、その……」

彼女の汗の匂いが鼻を通して脳を揺さぶってくる。ああ、マズイ。非常にマズイが目を離せないし嗅ぐのを止めることもできない。

少しして、不敬をニトクリスに見つかることになるが、それはまた別のお話だ――。

沖田オルタちゃんにも膝枕で耳かきされる話

「ふう、何の予定もなくのんびりするのも久しぶりだな」

今年のギル祭りも終わり、僕は久しぶりに自室でくつろいでいた。

体感的には三カ月くらい時間が過ぎてている気がするが気のせいだろう。多分。うん、多分……。

「入るぞ、マスター」

そう言つて導入もそこそこに入ってきたのは、沖田総司オルタナティブ、別名沖田オルタちゃんであった。というか、返事する間もなく入ってきたねこの人。

「あれ、沖田ちゃん。今日はどうしたの？」

「ああ、マスター。ちよつと聞きたいことがあるのだが」

「あ、うん。何かな？」

「マスターは最近ぼつくすがちやとやらで忙しかったのだろう。だから、『溜まって』いるのではないか？」

「えっ、たまつて……。えっえっ……。えっ……。？」

直球すぎる質問に思わずどもつてしまう。

「どうなんだマスター？ その、忙しいと『溜まって』しまうものだと言ったのだが、間違っていたらどうか？」

「いやその、間違つてはいないというか。うん、間違つてはいないんだけど、僕も男だからそういうことを言われると、その、少し困るというか……」

「？ 何か問題があるのか？ もし溜まっているのなら、私がシてやろうと思つたのだが。ダ・ヴィンチちゃんのお店で道具も買つてきたことだから」

「ええっ!? 道具も!？」

「このアルターエゴ、スケベすぎるっ……。結婚しよ……。」

「ああ、煉獄耳かき棒だ。かっこいいだろう？」

「そう言つて取り出した通常のものよりも細長い黒色の耳かき棒を見せてくる。」

「えっ、耳かき棒？ えっえっ……。あつ……。あく、そうね耳かきね！ いや、分かつていたよ。最初からね。うん全部知つてた。マスターだからね。マジ本だから」

「？ それで、溜まっているなら耳掃除してやるがどうだ？ というか私がやりたいぞ。やりたみ」

「じゃあ、その、お願いします」

「ややくしい言われ方だったのか、それとも僕の心が汚れているだけなのだろうか。」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「マスター、私の膝にごろんとしてくれ」

ベッドに腰かけ、自らの太ももをぺちぺちと叩き、僕にそこに来るように言う。

「それじゃ、お邪魔します」

「ふふっ、私のむちしつとり膝枕はどうだ？ 痛くないか？」

「い、痛くはないけど、その言い方どうしたの？」

「ああ、ダ・ヴィンチちゃんがこう言うマスターが喜ぶと言っていな。どうだ？」

これきつとさっきのやり取りもダ・ヴィンチちゃんの入れ知恵だな。

僕はなんとなく恥ずかしくココココと頷き返事をした。沖田ちゃんはその様子にとっても満足したようだった。

「まずは耳の外側をふきふきするぞ。冷たい化粧水をしみ込ませたこつとんで拭いていくぞ」

そう言い、ぽとぽと化粧水をコットンへ染み込ませ耳の外側へと当てる。ひんやりとした感触が気持ちいい。

しゅっ……。くくっ……。しゅうう……。きゅっ……。きゅっ……。

まずは、耳の付け根から。優しく撫でられる感覚が心地いい。

「ふき取り化粧水というやつらしいぞ。これで外側の汚れを取っていくからな」

外側を掃除し終えると、次に内側の溝へと移った。先ほどまでよりやや力を込め掃除していく。拭くというよりぬぐうという感じだろうか。

くっ……。ぎゅっ……。ぎゅぎゅっ……。くっ……。

片耳が終わると反対側も同じように綺麗に拭かれていく。あまり気にしていなかったけど、拭いてもらう前と後では心なし耳の軽さのようなものが違う気がする。うまい表現が分からないが清々しい感じというか。

「よし、お待ちかねの耳かきで掃除していくぞ。」

そう言い、沖田ちゃんは煉獄耳かき棒を耳の内部へと侵入させてゆく。

「最初は入り口付近の細かい汚れを優しくなぞっていくぞ」

すすっ……。すっ……。すっすっ……。

耳かき棒を巧みに使い、先端部分で優しく何度も入り口を刺激される。

こそばゆくも耳内部をマッサージされている感覚に背筋がぞわわつとなり、思わず吐息が漏れる。

「気持ちいいか？ 可愛いぞ、マスター」

自身の耳が紅潮してゆくのを感じる。女子に可愛いと言われても嬉しくないという人がいるが、ぶっちゃけこんな美少女に膝枕されて可愛いって囁かれるの本当ヤバイ。

雄であることを辞めてしまいうレベルでヤバイ。

それから沖田ちゃんは徐々に耳の深部へと耳かき棒を徐々に”掻き”進めていく。手先が器用なのか沖田ちゃんの耳かきはとても上手く、僕は彼女の太股に溶けてしまいうんじやないかというぐらい蕩けきっていた。

「ふう、これで大体綺麗になったな」

「うん、沖田ちゃん有り難うね。本当、その、すごかったよ……」

まるで事後の女子のようなコメントだと自分で思った。恥ずかしい。恥ずかしみ……。

そろそろこの太股での生活（もとい耳かき）も終わりかなと思いつち上がろうとする、上から沖田ちゃんに押さえつけられてしまった。えっ、ここに永住してもいいの!?

「まだだぞ、マスター。まだ耳掃除は終わっていないぞ」

「え、でも、いつもやっているところぐらいまではやってもらったよ……う？」

「マスター、煉獄耳かき棒はな、伊達じゃないんだ」

漆黒に黒光りする耳かき棒を持ち、沖田ちゃんは自身満々にそう宣言した。

☆☆☆☆☆☆☆☆

こりっ……。そりっ……。ぞりりっ……。
「あっ……。おっ……。んふう……。んおおっ……」

先ほどまでとは桁違いの衝撃。耳の奥が圧迫されるような苦しみ、その中でかすかにある気持ちよさ。まるで災厄が解き放たれた後のパンドラの箱のよう。

僕は、彼女の通常より細長い耳かきにより、未開発であった鼓膜付近を耳掃除されていた。

ぞりっ……。つと一掻きされる度に息が荒くなる。新雪に足跡を残すかのように、今まで誰にも触れられたことのなかった敏感な部位を踏破されてゆく。

ずりっ……。くくっ……。

最初こそ苦しいとしか感じなかったが、それが少しずつ和らいでいくのを感じる。耳かきの振動が耳奥から脳に伝わり、頭部全体が彼女に犯されてゆく。

涙が浮かび、鼻からも口からも体液が漏れ出す。これは知ってはいけない感覚だ……。

心も体も白旗を揚げた頃、やっと沖田ちゃんによる耳かきは終了した。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「どうだ、ちゃんと耳かきできていたか？ マスター」

純朴な表情で首を傾げながら沖田ちゃんはそう尋ねる。

正直、衝撃度だけで言えば今までしてもらった耳かきの中で一番凄かった。しかもこれで耳かき初心者だというのだから、今後彼女がさらなる進化を遂げたとき一体どうなってしまうのか空恐ろしくもある。

僕が褒めると、沖田ちゃんはニコリと嬉しそうに笑った。

「ときにマスター。一つ聞きたいことがあるのだが」

「あ、うん。僕に答えられることなら」

「耳垢の臭いはおでんの香りと似ていると聞いたのだが本当か？」

だ、誰だ純粋な彼女にそんなことを教えたのは!?

「そ、そんなことは……ないよ！ いや、正直僕も耳垢を嗅いだ経験なんてないからどれぐらい違うかは分からないけれど、それはきつと違うと思う！」

「うむむ……。でも、マスターも分からないのなら、ちようどここにマスターの耳垢もあるし試してみよう」

そう言い、彼女はティッシュの上に置かれた僕の耳垢へと鼻を近づけ――。

「えっ!?! ちよ、まつ! まってえっ!?!」

僕はそれを全力で阻止しにいったのだが、果たしてどうなったかというのは僕だけの

心の中にしまっておくことにしよう……。